

課題解決型の話し合い活動における協働的な発話連鎖 —聞き手の積極的な参与に着目して—

星野 祐子

1. はじめに

近年、学校教育はもちろんのこと社会生活のあらゆる場面において、多人数の会話参加者による話し合い活動が取り入れられている。こうした話し合い活動においては、会話参加者が、現行の話題に関して自分の意見や考えを積極的に発話場面に提示することが重要となる。また、多人数会話の場合は、自分の意見や考えを発話場面に提示すると同時に、場の流れに見合った提示のタイミング、他者発話を受けた上での柔軟な意見調整、協働的なやりとりの応酬が期待される。

本発表では、日本人大学生4人に課した課題解決型の話し合いデータを用い、多人数における話し合いがどのような発話連鎖によって展開されているかを示す。4人で会話をなす場合、それぞれがどのような立場で話し合いに参画し、意見と応答を重ねているのだろうか。

2. 先行研究

課題解決場面や話し合いについての先行研究には、柏崎・足立・福岡(1997)、若野(1998)、梶本(1998、2000)等がある。

柏崎他(1997)は、合意形成に至る過程において、重要な役割を担う「話段」に注目し話し合い活動の分析を行った。分析の結果、合意形成に至る過程において重要な役割を担うものとして、「提案要求」、「提案」、「提案応答(同意/不同意/中立)」、「決定を促す」、「決定」といった話段の存在を認め、各話段の特徴ならびに各話段の特徴を支える言語形式を指摘した。

若野(1998)は、大学生10人程度から成るサークルのミーティングをデータとし、合意を導く上で繰り返し出現する可決と否決のストラテジーについて論じた。ここでは、主として可決と否決に直結する部分が分析対象とされている。

梶本(1998、2000)は、立場の異なる会話参加者が参与するミーティング場面をデータとして扱った。梶本(1998)では、提案に関わる発話の連鎖を指摘し、提案の際に用いられる言語形式について、パラ言語の影響も考慮しながら分析を進めた。続く、梶本(2000)は、会話参加者の上下関係が話し合いの展

開にいかに関与を及ぼしているかを分析し、話し合いの連鎖構造には4つのパターンがあることを明らかにした。ただ、梶本(1998、2000)が扱ったデータは、上下関係がみられるものが中心であった為、会話参加者の話し合いに対する参与のあり方は固定しており、会話参加者の間で流動的な役割交替はみられなかった。

以上が課題解決場面における代表的な先行研究である。いずれのデータも多人数会話の分析であったが、得られた表現についての分析が中心となり、その場に参与する複数の会話参加者が、先行のやりとりを受けどのように応答を重ねているかを詳細に分析したものはない。ここでは、ある話題に関しての「4人」の言語行動を俯瞰的に捉え、4人がどのように発話を重ねているかを示す。

3. データ

ある大学の教育学部に在籍する学部学生をインフォーマントとし、話し合いのデータを収録した。収録期間は2007年7月から8月で、同性の親しい友人同士4人グループの活動を録音・録画した。収録時間はそれぞれ約20分で、今回は8グループ(男性グループ4、女性グループ4)の活動をデータとする。

話し合いのテーマは、「高校生向けに学部紹介ビデオを作るとしたら、どのようなことを紹介するか。また、話し合いを元にキャッチコピーを作るとしたらどのようなキャッチコピーがいいか」というものである。

4. 分析

本発表で扱う課題解決型のデータにおいては、課題解決につながる可能性のある様々な意見が提示され、それに対する様々な応答が出現している。この過程には、同意の対象となる意見もあれば、却下の対象となる意見もみられ、さらには、先行のやりとりを統括しgoalへ導く突破口となるような意見もみられる。

ここでは、それらの意見と応答によって成る連鎖を、それぞれ「意見に対する肯定的な連鎖」「意見に対する否定的な連鎖」「停滞したやりとりに転換の契機を与える連鎖」とし、「意見に対する肯定的な連鎖に」関しては、次の下位連鎖を設定した。

表1 発話連鎖の分類

発話連鎖のパターン		下位連鎖
意見に対する肯定的な連鎖	連鎖の中核となる意見が最終的には支持される	アイデア展開の連鎖 アイデア修正の連鎖 アイデア補足・再掲の連鎖
意見に対する否定的な連鎖	連鎖の中核となる意見が最終的には却下される	
停滞したやりとりに転換の契機を与える連鎖		

4. 1. 意見に対する肯定的な連鎖

提出されたアイデアについて展開・修正・補足を行うことで、よりよいアイデアへと価値を高めるものである。アイデアとしての価値を高めていくにあたっては、当該意見に対する否定的な評価や精緻化の要求、修正の要求等、初出のアイデアに対する厳しい評価がなされるが、最終的にはフロアを納得させるような意見が導き出される。

4. 1. 1. アイデア展開の連鎖

「アイデア展開の連鎖」は、初案を提示した会話参加者に対して、他の会話参加者が精緻化を要求したり、具体的な情報や根拠を追加することによって、アイデアを徐々に展開、進展させていくものである。このアイデアの展開にあたっては、元々の話

し手を中心となって展開していくもの(1)と、元々の話し手のアイデアを受け、他の会話参加者が積極的に展開していくもの(2)に分けられる。

(1)では、Cが一連のやりとりを牽引しており、Kの精緻化要求(68)、Tの理由付け要求(75)や根拠付け(81・83)によって、アイデアがより具体化されていく。また、参加者Sは、ここでは聞き役に徹し、同意(78)やあいづち(82)といったサポート的な立場で話し合いに参画している。

続く(2)は、元々の提案者Nのアイデアを、Kが具体的な例を交えながら進展させ、最終的には「韻をふむ」(494)というアイデアをYが提示したものである。本例は、(1)と異なり、固定した話者が話題を牽引するのではなく、会話参加者の相互作用によってアイデアの進展・具体化が図られている。

(1) 学部の良いさを考える (女性G1)

67	C			あ あれなんじゃん 変な人いないじゃん?	意見
68		K		変な人がいないって?	精緻化要求
69	C			なんかさ: ちょっと なんかちょっと なんか 超意地悪な人とかいなくない?	意見の精緻化
中略					
74		K		いないない 確かに	
75			T	なんで [なんでって言われたらさ:]	理由付け要求
76		K	S	[hhhhhhhhhhhhhhhh]	
77	C			ちが ちょっとそれはなんかさ: うちの大学 こう のほほ: んとした	意見の再精緻化
78			S	[それわかる]	
79		K		[のほほんとしてる] わかるわかる	
80	C			しかも【学部名】だから	意見の再精緻化
81			T	え でも 誰か言っていたよね なんか来た人が【大学名】のいいところは	根拠付け
82			S	うん	
83			T	のびのびとした	根拠付け

(2) キャッチコピーの本質を考える (女性G2)

477	N			なに もっと軽い感じじゃない? キャッチコピーって [雰囲気言えば]	意見
478		K		[いける 話せる 【学科名】]	具体例提示
479	N			あ なんか [そう]	
480			Y	[いける?]	
481	N			う:ん なんかわかんないけど	
482		K		わかんないけど	
483	N			気持ちはわかる そういう感じ	
484		K		遊ぶ遊ぶキューブみたいな	具体例提示
485				(2) [hhhh]	
486			Y	[なにそれ]	

487		K		hhhh	
488			Y	遊ぶ遊ぶキューブ?	
489		K		なんか最後の文字があつてるよ みたいなんでも	具体例解説
490			Y	うん	
491		K		いいよね	
492	N			[あ：:]	
493		K		[あ：:] あ：そうそう	
494			Y	顔をふむのね	換言・まとめ

以上が、「アイデア展開の連鎖」の具体例である。先行のアイデアに対して、その不明点を解決していくことで、初出のアイデアに具体性を与えフロア全体の理解とすることが意図されている。

4. 1. 2. アイデア修正の連鎖

先に取り上げた「アイデア展開の連鎖」は、初案に対して具体化や精緻化の作業を行うことで、完全とはいえないアイデアをより確かにするものであった。続いて取り上げる「アイデア修正の連鎖」は、先行アイデアを踏襲しながら、それを部分的に修正することによって、より目的に適合する形でアイデアを調整・修正していくものである。したがって、(1)とは異なり、やりとりには、先行アイデアに対する不満や懸念も表れる場合がある。(3)では、53K、54Y、58Yに、直接性の程度には幅があるものの、先行意見への懸念が出現している。

また、本例では、黙殺された意見Aを除く意見B・C・Dに、語彙的なつながりと関連性を見出すことが

できる。具体的には、意見C「先生のおもしろさ」は、意見B「授業内容」と関連することで導き出され、意見D「先生の個性」は、先行意見Cとの関連で導き出された意見であると考えられる。

次に、会話参加者の相互作用の観点から本例を見てみよう。まず、意見C(56)の発案者であるIは、先行の50~55のやりとりには関与しておらず、「授業内容」という意見に合意が得られなかった後を見計らって、修正案「先生のおもしろさ」(56)をフロアに提示した。話し合いにおいては、このように事態を静観する者から新たな意見が考案され、先行のやりとりに決着が付けられることがある。また、Iが提案した「先生のおもしろさ」についても、先行のやりとりと同様、懸念が提示(58)され、懸念を提示したYによる修正案提示(61)を経て、「個性」というキーワードが導き出されることになった。

以上のことより、先行意見のアイデアを修正させることによるアイデアの適切化は、課題解決の一方略として位置づけることができる。

(3) 学部のよさについて考える (女性G7)

50	K			また 考えた紹介内容にふさわしいキャッチコピーを え↑どうということ紹介したいか?	意見要求
51		Y		[え? 緑が多い]	黙殺された意見A
52			S	[授業内容?]	意見B
53	K			授業内容?つまんなくない?	意見Bへの懸念
54		Y		[hhhhhh] ま ぶっちゃけつまらない	意見Bへの懸念
55			S	[あ：：：：:]	
56			I	じゃあ 先生のおもしろさ	意見C
57	K			先生のおもしろさいいんじゃない? [先生にしようよ先生 先生]	意見Cへの同意
58		Y		[先生 おもしろいかなあ?]	意見Cへの懸念
59			S	[hhhhhhh]	
60			I	[hhhhhhh]	
61		Y		先生は 先生は すごい個性が多い=	意見D
62	K			=個性おもしろいおもしろい	意見Dへの同意
63			I	うん	意見Dへの同意

4. 1. 3. アイデア補足・再掲の連鎖

話し合いの場におけるアイデアは、常に完成した形で提示されるわけではなく、会話参加者の相互作用により次第に洗練されていく。ここで取り上げる「アイデア補足・再掲の連鎖」は、提示意見について、他の会話参加者から理解が得られなかった場合や否定的評価を下された場合に、補足や解説を

加えその意見を改めて発話場に提示するものである。提示意見の補足を行うにあたっては、自らが行う場合と他の会話参加者が元々の提案者の真意を汲んで行う場合がある。

(4)は、一度却下されたアイデアが、元々のアイデアの提案者以外によって、改めて提案されたものである。

(4) 大学のよいところについて考える (男性 G6)

78	W			駅から遠い	意見 A
79		I		hhh	
80			S	それ [よくないんだよね]	対 A 否定的評価
81			K	[マイナス面だよ]	対 A 否定的評価
中略					
96		I		(2) 駅から遠いから アットホームな感じ	意見 A'
97	W			[お: :] いいね	対 A' 肯定的評価
98			K	[おっ] いいね hhh	対 A' 肯定的評価
99		I		Hhhh	
100	W			マイナス面もプラスに変えていくんだよ	対 A' の意義
101			S	あ 書いてく? 駅から遠いから	

本例においては、W の意見「駅から遠い」(78) が、96I によって「駅から遠いからアットホームな感じ」と再掲されている。この I の発案に対して、元々の発案者であった W は、「マイナス面もプラス面に変えていく」(100) と、81K の発話を一部取り込みながら、再掲された意見についてその意義を述べている。

続く (5) は、聞き役であった K の否定的意見を受け、ワキの聞き手¹である N が解説を行い、当該意見が再度話題として取り上げられた例である。

本例では、前半部分で「学科らしい話題」について自らの経験を述べる Y (323, 325, 327) に対して、K (328) が「(その意見は) 関係ない」と否定的な評価を与えている。その後、否定的評価をなされた Y に対して、N (330) がフォローを示すことで、Y・K・N の三者の相互作用が見られた。

ここで、この三者の発話の連なりに注目すると、N (330) の補足発話の一部に Y (331) が発話を重ねており、N のサポートはまさに Y の言わんとするところであったことが推察される。なお、ここでは N (330) が発した並立助詞「と」が予告マーカーとなり、Y と N のユニゾンの発話(「まじないよね」)が生起することとなった。これを受け、K (332) は納得の態度を見せ、334 で再び turn を得た Y は改めて自己補足・再掲を行うことができた。

このように、二者間において意見の不一致がみられた場合に、第三者的な場の者がその不一致の解消を図ることは場の雰囲気や友好的に保つ上では重要である。そして、こうしたやりとりは多人数会話ならではのものではあろう。

(5) 同一学科の友人との会話に出てくる話題について Y が経験を語る (女性 G2)

300	Y			でもさ うちらさ 結構さ 文学的な話しない?	意見
301		M		[あ: :]	
302			N	[あ: :]	
303			K	[あ: :]	
304	Y			“なんか” って言うよね みたいなさ	意見
中略					
323	Y			わたし さすがって思ったんだけど 関係ないんだけど なんか “まじないよね” って言うじゃん	関連意見
324			K	うん	
325	Y			ないってなんだよって感じじゃない?	関連意見
326			N	hhhh	
327	Y			すごい思ったの	関連意見
328			K	全く今関係なくね? Hhh	否定的評価
329	Y			すみません ちょっと思ったの	
330			N	“なんか” : : ということ [“まじないよね”] のつながりだよ わかるわかる	他者補足・再掲
331	Y			[“まじないよね”]	
332			K	なんか あ: :	
333			N	うんうん	
334	Y			そういうの [日本語として] おかしいよね みたいな	自己補足・再掲

4. 2. 意見に対する否定的な連鎖

先行アイデアに対して否定的評価を与える際、言語情報としては、①直接的な評価評価の提示 (6 - 200)、②改善策提示 (6 - 203)、③アイデアが目的と逸れていることの提示 (7 - 409、411) といった方

略がある。

非言語情報としては、①沈黙 (6 - 200)、②笑い (6 - 201、202)、③フィラー (7 - 409) などにより、否定的評価を含意をもって伝える方略がある。

(6) 学部のおいところについて (男性 G5)

199	M			(2) 早い段階から現場がみれる	意見
200		S		(1) なげえ [なげえよなげえ]	沈黙……………① 否定的評価……………①
201			Y	[hhhhhh]	笑い……………②
202			I	[hhhhhh]	笑い……………②
203			Y	電車のつり革とかにある感じにして下さいよ	改善策提示……………②

(7) 大学のよいところについて (男性 G6)

405	K			[交通の便悪く] 自宅生が多いから	意見
406		W		うん	
407	K			あ ちが 周りにいる人たちは [すぐく仲良くなれる] みたいな	意見
408		W		[そうそうそうそう]	
409			S	ん：： なんか あれじゃん [大学の所在県] の人をさ	フィラー……………⑤ 目的逸脱の指摘……………③
410	K			うん	
411			S	絞っていくならさ それダメじゃん	目的逸脱の指摘……………③

では、多数会話だからこそ発現する否定的評価の連鎖をにはどのようなものがあるだろうか。以下の例は、当該意見に対して、他の会話参加者との協

働により、否定的なコメントを伝達しているものである。

(8) 具体的なキャッチコピーを考える (男性 G5)

268	S			え：と 授業は () 指導要領で作るんじゃない	意見
269		M		(1) おお	
270	S			現場で作るんだ (2) どう？	意見+沈黙 +反応要求
271		M		[どうって]	困惑
272			T	[hhhh]	笑い
273			Y	[hhhh] ベースにMくんのがありますよね [完全にまずは]	笑い +客観的評価
274		M		[hhhhhh]	笑い
275	S			[hhhhhh]	笑い
276			T	[確かに]	
				で 高校生向けでしょ？	目的の確認
277			Y	指導要領って [ことばがわかるかどうか]	懸念事項提示
278			T	[指導要領ってさ：:] 高校生わかるかな：：？	懸念事項提示

(8) では、ヒット映画²になぞらえて提案されたキャッチコピー (268、270) に対して、M・T・Yが困惑の態度を言語的・非言語的手段で伝達している。その後、Y (273) により客観的な評価がなされ、全員の笑いが引き出されることになった。この笑いの共有を経て、否定的評価の伝達を許容する土壌が築かれた後、277・278の共同発話により、提案された

アイデアの問題点が指摘された。

なお、今回用いたデータは、あくまでも設定した場面における話し合いデータであるため、会話参加者にとって課題解決に向けての切実感はありません。しかし、意見に対する否定的評価を伝達するにあたって、話し合いの目的を改めて考えるよう促したり、それを契機に他の会話参加者が否定的評価や懸念事

項を提示することは、切実感の高いデータにおいても変わらないことであろう。

4. 3. 停滞した話し合いに転換を与える連鎖

以下に取り上げる例は、最終的なキャッチコピー考案の場面である。ここでは、キャッチコピーとして外せない要素について、KとMによる意見対立がみられる。こうした二者間による意見対立は、二者間会話においてももちろん三者間以上の会話にもみられるが、当事者以外の者の客観的な意見によって、新たな局面（ここでは最終的な合意の局面）への転換が図られることがある。

ここでは、「説得力」を重要視するM(619)と「体言止め」にこだわるK(621)の両方を満足させるキャッチコピーが、630Sによって提案された。そして、この630S以降、話し合いが進展し終結に向かうことになる。なお、630以前には、フィラーや沈黙も観察されており、630以前は、話し合いが停滞していたと考えてよいだろう。

また、Sの折衷案提案を受け、先行のやりとりではSと同様、第三者的立場にあったNが、即座に感想を述べており(632)、静観していた者の積極的な参加が、場面に転換を与える効果を持っていることが推察される。

(9) 最終的なキャッチコピーについて (女性G3)

607	K			即戦力 即戦力になるう?	意見
608		M		なんかさ 断言しちゃった方がよくない?	不支持
609	K			あ: : :	
610			N	hhhhh	
611		M		なんとかできる みた [いな]	代替案
612			N	[うん]	
613		M		なんとかする とかさ	代替案
614			N	即戦力	
615	K			それ目標じゃん キャッチコピーじゃなくて	代替案不支持
616			S	hhhhh	
617		M		え そんなもんでしょ だって	代替案支持
618	K			そうかな: :	不満
619		M		だってさ 説得力がないとき なんかさ [(ふん とかいつぱい・・・)]	代替案提案理由
620	K			[なんかさ でもさ]	
621	K			キャッチコピーだと体言止めのイメージなんだけど	代替案 不支持理由
中略					
628	K			(3) [え: :]	
629			N	[あ: :]	
630			S	(3) 培え即戦力 とか	統合意見提示
631		M		[あ: :]	
632			N	[あ: :] それすごいね [培え] って なんか使いたい [感じ]	積極的支持
633		M		[うん]	
634	K			[格好いい] うん	

5. おわりに

多人数会話における発話連鎖の特徴として、一連のやりとりにおける4人の発話の関連性に注目し分析を行ってきた。今回わかったことは以下である。

まず、提示された意見を始発として、その意見の納得感を高めていく過程には、質問・応答を繰り返すことでの意見の精緻化、意見の部分的修正、補足・再掲などがある。これらの過程は、先行のやりとりにみられる不明点や不備を、聞き役にある会話参加者が積極的に指摘、補足することで効率よく展開する。

一方、提示された意見が最終的には却下される場

合の発話連鎖においては、元々の提案者以外の者同士が、提案内容に対する否定的評価を小出しに積み上げ、協働で否定的評価を伝達しているものが確認された。

最後に、停滞する話し合いに転換の契機を与える発話連鎖に関して、当該やりとりにおける4人のturn数を調べた結果、第三者的立場の客観的な介入が、場面に転換を与え次の局面に移行を促す契機となることが示された。

以上が、多人数会話の特徴として今回得た結果である。

続いて、今後の課題を述べる。まずは、他言語と

の比較による日本語母語話者ならではの話し合いスタイルを指摘したい。例えば、英語母語話者と日本語母語話者の会話を比較した Jones (1990) では、日本には“myth of harmony”があるとし、日本語母語話者の会話ではコンフリクトの回避が積極的に行われるとの指摘がなされた。果たしてそれは、現在の日本人大学生の会話においても言えることだろうか。さらに、Watanabe (2004) でも、日本語母語話者のグループディスカッションでは、衝突が極力避けられることが指摘されている。この Watanabe (2004) で課されたディスカッションテーマは、意見交流型³の課題であったが、本発表で取り上げた課題解決型の課題でも Watanabe (2004) が示した傾向は見られるのだろうか。

以上のような観点の下、今後は質の異なるデータとの比較研究を試みたい。さらに、今回使用したデータと同様のデータを追加することで、質的のみならず量的な分析も行う予定である。

【文字化の方法】

行頭の数字は、文字化資料に付けた発話番号（通し番号）である。続くアルファベットは、話し手のイニシャルを示す。また、発話を転載するにあたって用いた記号は以下である。: は音の引き延ばし、[は発話の重なり、(数字) は沈黙の秒数、h は笑い、? は発話末の上昇調イントネーション、【 】内は、本来は具体的な名称が述べられていたことを示す。

【付記】

本研究は、財団法人博報児童教育振興会による「2006年度 第2回博報『ことばと文化・教育』研究助成」の助成対象研究「日本語相談談話の談話分析—相互行為方略・発達過程を観点に」（研究代表者：星野祐子）の研究の一部である。

【註】

- 1 当該の発話を間接的に聞く者（本例の場合は、Kの発話はYに対して向けられているが、その場に参与するNも間接的に聞いている）
- 2 『踊る大捜査線 THE MOVIE』
1997年1月～3月にフジテレビ系で放映された織田裕二主演の連続テレビドラマのヒットを受け、公開された劇場映画。Sがアイディアの参考にした劇中の台詞は、主人公がクライマックスで叫ぶ「事件は会議室で起きてるんじゃない、現場で起きてるんだ!」である。
- 3 例えば「言葉や文化の違いから日本人とアメリカ人の中に生じやすいミスコミュニケーションについて、具体的な例を挙げながら話し合ってください」といったものである。

【参考文献】

- 柏崎雅世・足立さゆり・福岡理恵子 (1997) 「インフォーマルな『と』相談における提案の分析」『日本語教育』92 日本語教育学会 pp.60-71
- 根本総子 (1998) 「会話者による提案の連鎖の組織化」『日本語・日本文化研究』8 大阪外国語大学日本語講座 pp.77-88
- 根本総子 (2000) 「人間関係からみた課題解決の会話の連鎖構造」『世界の日本語教育』10 国際交流基金 pp.221-239
- 若野恵 (1998) 「可決・否決のストラテジー—大学生の話し合い場面の会話分析—」『日本語と日本文学』26 筑波大学国語国文学会 pp.23-38
- Jones, Kimberly Ann. 1990. *Conflict in Japanese conversations*. University of Michigan: Ph.D.dissertation.
- Watanabe, Suwako. 2004. *Conflict Management Strategies in Japanese Group Discussions*, Szatroeski, P. (Ed), *Hidden and Open Conflict in Japanese Conversational Interaction*, Tokyo, Japan: Kurosio Publishers pp.65-93.